

グローバル・イングリッシュ研修 —第1回情報通信学部留学プログラムの報告—

岡田 礼子*¹ 福崎 稔*¹

A Study Abroad Program for IT Engineering Students

by

Reiko OKADA*¹ and Minoru FUKUZAKI*¹

(received on May 28, 2012 & accepted on July 4, 2012)

Abstract

This paper reports on the first study abroad program prepared for the students in The School of Information and Telecommunication Engineering in Tokai University. The aim of the program is to give students who are expected to work globally as IT engineers opportunities to be exposed to different cultures, diverse ideas and global interactions. The program was planned in the way (1) to minimize the cost paid by students and (2) to accept all the motivated applicants without any screening for English language ability. To minimize the cost, two-week program in Hawaii was decided. In order to check the candidates' motivation, they were required for three months before departure (1) to self-study English using Web listening materials and (2) to join several small-group sessions where they discuss in English what they had studied on the Web. All the twenty students who had applied were allowed to participate in this study abroad program, which included variety of interactive learning and experiences with diverse people, besides basic English lessons in the morning.

The participants' feedback indicated that their way of seeing the world had changed greatly, some finding new goals in their lives, some planning to join another overseas study in the near future, and majority feeling confidence in getting along with people from different cultures. Moreover, 90% of the participants realized the importance of studying English and were willing to study English harder.

Keywords: Study abroad, educational purpose, intercultural understanding

キーワード: 海外留学, 教育的意義, 異文化理解

1. はじめに

東海大学情報通信学部は、世界で活躍できるIT技術者の養成をめざして2008年に開設された。しかし、学生の入学時の英語力は高いとはいえず、またそれ以上に英語を使うことに自信がない学生が多かった(付録1, 2)。そこで、学力別少人数クラスにて、すべての学生にきちんと理解させる指導を全教員で一致して行った¹⁾²⁾。徐々に学部全体の英語学習に対する意欲を向上させることができ、留学を希望する学生も現れるようになった。留学希望者には、東海大学国際教育課の海外派遣留学プログラム³⁾を勧めた。しかしながら、費用の問題や選抜試験があることを理由に、応募を諦める学生が非常に多かった。

そこで、意欲のある学生ならだれでも参加できる情報通信学部独自の留学プログラムを企画した。本稿では、2012年2月に初めて実施した情報通信学部の短期留学プログラム「Global English 研修」について報告し、その成果と課題について考える。

2. 2009年度留学プログラム企画の失敗

今日、外国企業の日本進出、インターネット上の膨大な英語情報、世界の技術者とのコミュニケーションの必要性、英語を社内公用語とするIT企業の出現など、IT技術者にとって英語は避けられないものになってきた。そのような社会情勢に鑑み、情報通信学部ではグローバルに仕事ができる技術者を育てる教育の一環として、留学プログラムの設置を学部開設2年目の2009年6月に検討し始めた。

ハワイ東海インターナショナルカレッジ(HTIC)、カナダのUniversity of British Columbia(UBC)、University of Guamの各大学と、学期開講時期、可能な学習内容と形態、単位認定の可能性、必要な経費などの話し合いをした。しかし、どの大学とも途中で話が行き詰まり、いつの間にか留学プログラムの計画は消滅してしまった。

後になってその理由を振り返った。伝統的に、高等教育機関における留学の目的は語学力を身につけるという側面と、専門の学問分野をより高度に学ぶという側面が認められてきた。しかし、留学から得られる教育的価値には、語学の習得や学問分野の学

*1 高輪教養教育センター教授
School of Information and Telecommunication
Engineering, Liberal Arts Education Center,
Professor

びやといったアカデミックな側面だけでなく、異文化体験や人間の成長といった側面もあり、そのようなノンアカデミックな側面まで含めて、留学の教育的価値をとらえるのが適切である(足立⁴⁾。しかし2009年の段階では、無意識のうちにアカデミックな教育成果を期待する留学をめざしており、そのために、一定レベル以上の語学力の必要性、単位振り替えの問題、日本不在期間の授業の扱い、開講時期の調整など、さまざまな問題が発生した。また、言語運用力の向上を主たる目的とすると滞在期間を長くする必要があり、それに伴いかかる費用も高くなるのが問題であり、情報通信学部だけで参加者を集めることが難しいと思われた。これらの問題が解決されなかったため、計画はいつの間にか消滅してしまった。

3. 情報通信学部留学プログラムの理念

その後、第2期生、第3期生の英語に対する意欲が向上し、高い英語力を持つ学生も増え、2010年度には、UBCやHTICの留学に選ばれる学生や、UBCの理系語学研修に参加する学生が数名ずつ現れた。その反面、資金的な問題で留学を諦めざるを得ない学生も多数いることがわかった。

そのような中で、2010年度末に情報通信学部の留学プログラムを再度検討することになった。今回はまず、留学の理念を以下の通り明確にした。

グローバルエンジニアをめざす情報通信学部の学生にとって、留学の第1の教育的価値は、英語力の向上ではなく、外国の文化や価値観を理解した上で、コミュニケーション能力に自信を持たせ、国際的志向を高めることである。つまり、世界で活躍できるIT技術者をめざす意欲がある学生を対象に、たとえ英語能力が十分でなくとも、世界の人々と交わることを体験させ、世界に向けて高い目標を持つきっかけとなる留学を実施する。

これは、「必要書類を提出後、書類選考、面接(日本語による人物検査と英語面接)、適性試験を受け、学科成績などと総合的に審査され内定を得る」⁵⁾東海大学国際教育課の留学制度とは、異なる意義を持つ。本学部の留学プログラムは、意欲のある学生が全員参加できる留学にするため、(1)英語力による選抜は行わず、(2)費用は学生自身のアルバイトで準備できる程度に抑える、という前提で企画を始めた。

4. 研修の概要と参加学生の決定

4.1 実施の決定

航空料金や宿泊費などを低く抑えられる点から、留学先はハワイのHTICとし、日本での授業に影響が出ないように、実施時期は秋semester終了後の2週間と決めた。そして、最低15名の参加で実施可能となるよう、HTICのスタッフにプログラムを作成してもらった。概要は以下の通りである。

研修名 : グローバル・イングリッシュ研修
 渡航期間 : 2012年2月13日(月)～2月27日(月)
 宿泊場所 : HTIC内の学生寮
 費用 : 学費、寮費、食費の合計で、約1,200ドル(\$1=90円換算で約100,000円)
 研修内容 : 語学研修、理系授業、現地学生との交流、IT関連企業の見学、理系学校の訪問

4.2 参加学生の決定

2011年7月にプログラムの概要を公示し、9月末日まで募集を行った。一番の心配は、希望者が15名に達しない場合であった。夏休み前から、1-2年次の英語授業で専任教員がプログラムの意義を説明し、チラシを配布した。昼食時にはカフェテリアでアナウンスし3-4年生の参加も呼びかけ、さらに過去に留学に興味を示した学生と個別面談をするなど、さまざまな広報活動を行った。その結果、予想以上の申込があり、締切日の午後5時に21名の応募があった。その後1名辞退したため20名での実施が決定した。参加学生の内訳は、以下の通りである。

Table 1 Number of Participants

1年次	8名	情報メディア学科	7名
2年次	9名	組込みソフトウェア工学科	2名
3年次	2名	経営システム工学科	6名
4年次	0名	通信ネットワーク工学科	4名
大学院	1名	専門職大学院	1名

5. JASSOの奨学金

文部科学省によると、「海外大学への日本人留学生数は6万6833人(08年)。ピークだった04年より2割減った」⁶⁾。また国際教育研究所発表の米国の高等教育機関における2010年度～11年度の留学生数は「日本は前年から約3500人減の2万1290人で・・・他国と比較しても減少率はもっとも大きい。2004年～2005年度から6年連続の減少」⁷⁾である。このような若者の内向きの現状を改善すべく試みられた方策に(独)日本学生支援機構(JASSO)による「2011年度留学生交流支援奨学金制度」があった。本学部で企画した「グローバル・イングリッシュ研修」は、この奨学金に応募し、運良く留学者20名に対して、一人あたり80,000円の支援が得られることになった。

この奨学金の応募条件として、第一に掲げられている項目は「大学の理念に沿った、教育的・効果的プログラムであること」であった。先にも述べたとおり、本学部の英語教育の最終的な目標は世界で活躍するグローバルエンジニアの育成である。この目標に向かって学部の英語教育はベクトルを揃えて進んでいるが、次のステップにつなげるには、実践的経験が必要であり、それなくしては目標達成に至ることは難しい。それゆえ、我々の教育理念の実現に不可欠と考えていた留学プログラムの実施は、募集対象の要件を十分に満たしていると考えられた。

また、「実施校において実施するプログラム」であ

るという要件も、我々には重要であった。その理由として、本プログラムでは、留学に向けた事前研修やガイダンスを半年間以上行い、留学決定時から実施までの期間が緊張感を保った教育環境となるよう構築・維持したことがあげられる。学生のモチベーションが留学期間に向けて最高になるように計画した点である。さらに短期留学であることは、通常の学科教育を長期欠席することなく実施できるプログラムであった。

応募してきた学生たちは、留学意欲を強く持ち、勉学意欲が高だけでなく、金銭面でも自ら準備しようとする自立的な学生が多かった。短期留学であっても、授業料、渡航費、滞在費などのすべての費用を考えれば、決して簡単にまかなえる金額ではないため、この奨学金制度は大変に有用でありがたい支援であった。

6. 渡航前の準備学習

留学を有意義で実り多いものにするためには、*Maximizing study abroad* に書かれているように、渡航前、渡航中、渡航後の一連の自主学習・思考・実践が必要であり、それにより異文化理解や意識変革が期待できる⁸⁾。そこで、本研修では、渡航4ヶ月前から次の4種類の事前学習を行った。

- (1) Web教材での自主リスニング学習
- (2) 3人ずつのスピーキング学習
- (3) 教員との英文Eメール連絡
- (4) 留学先に関する調べ学習

これらの学習は、東海大学の他の留学制度に伴う「留学英語」という単位修得可能な渡航前の講座とは性質が異なり、学生の自主的参加と教員のボランティアから成るものである。

自主リスニングでは、ALC社の多数あるWeb教材から4レベルの異なる教材を選び、各学生に適した教材を学習するように指示した。学習方法は、自分が学習できる時間に、やりたい量だけ学習し、それぞれ遭遇した未知語や新表現などをノートに書いて学習する、というものである。それを定期的に教員に見せるように指示した。

スピーキングレッスンでは、同じWeb教材で学習した学生3人ほどのグループで、リスニング教材のテーマを題材に話をした。筆者の研究室で実施し、入ってから出るまで、コミュニケーションは原則すべて英語で行った。下位レベルのグループでは、学習したストーリーを自分の言葉で再現させる *story retelling* をさせ、上位グループでは、学習したテーマから内容を発展させてディスカッションをさせた。どのグループも積極的に話そうとする姿勢が見られ、特に上位グループでは、お互いの話をさえぎってでも話そうとするほどの意欲で、普段の授業では見られない光景であった。

教員とのEメール送受信では、英文Eメールの書き方をまだ学習していない1年生にも、事前指導なしで教員から英文メールを送った。はじめのうちは日本語で返信してくる学生もいたが、そのうちに全員が自主的に英語で返信するようになった。メール

の内容は、ミーティングの連絡、自主学習の進み具合の確認、次回のグループレッスンの調整、資料提出の連絡、出発前の準備の確認など、すべて実際に必要な情報のやりとりである。学生からの英文Eメールは教員が印刷しておき、渡航前の最終レッスンで訂正すべき点を指導した。

調べ学習では、留学先の文化・習慣について、自分が訪れたい場所についての情報、訪問する企業の情報、などについて、各自で調べさせ、その情報の要点をEメールで教員に報告させた。

7. 現地での学習

HTICでの2週間の日程(Group Aの場合)は以下の通りである。(Group Bは一部時間帯を変えて同じプログラムを実施)

Table 2 Daily Program

	2/13 Day 1	2/14 Day 2	2/15 Day 3	2/16 Day 4	2/17 Day 5	2/18 Day 6	2/19 Day 7
午前		RW	RW	RW	RW	自由 行 動	自由 行 動
		SP	SP	SP	SP		
午後	チェック・ イン	ダイアモン ト・ハット 見学	個別 プロジ ェクト-1	高校 訪問	パール ハーバ ー見学		
夜	開講 式	HTICの 学生と 夕食会		ワークシ ョップ 数学	ワークシ ョップ 数学		

	2/20 Day 8	2/21 Day 9	2/22 Day 10	2/23 Day 11	2/24 Day 12	2/25 Day 13	2/26 Day 14	2/27 Day 15
ワークシ ョップ 環境	RW	RW	RW	RW	自由 行 動	自由 行 動		チェッ ク・ア ウト
	SP	SP	SP	SP				
	企業 訪問	個別 プロジ ェクト-2		発表、 閉講 式				

RW: Reading and Writing, SP: Speech Presentation

午前中3時間の英語授業(Reading/WritingとSpeech/Presentation)のほかに、数学のワークショップ、環境問題の実地研修(Honolulu Watershed Forest Reserve, Wahiawa Botanical Garden)、日本語学習中のHTICの現地学生との交流夕食会、現地高校Mid-Pac Instituteの理系クラスと日本語クラスの訪問、IT企業Visual Systems, Inc.の訪問、パールハーバーの見学と講義、個別プロジェクトなど、さまざまな形で異文化を体験させる活動が盛り込まれたプログラムを実施した。また、担当教員は、Reading/Writingクラスは日系ハワイ人、Speech/Presentationクラスはオーストラリア人、数学ワークショップはアルゼンチン人、

高校訪問や企業訪問の引率はハワイ在住のコロンビア人家族を持つ日本人であり、Global English 研修の名にふさわしく、世界の色々な英語を体験できる研修となった。

特に、同世代の学生との交流は非常に積極的な活動になった。寮を共にする日本語勉強中の学生との交流夕食会では、日本語と英語による交流をした。2日目に実施したこの交流で友人ができ、週末を共に過ごした学生もいた。また、現地高校のテクノロジークラスの見学では、ゲーム作成、アニメ作成、ロボット作成などのチームが課題に取り組む中を自由に見て廻らせてもらい、学生間のやり取りが盛んに行われた。

企業訪問では、IT 業界でのグローバル・ワークの実態や、日々進歩する IT 技術に遅れないための苦勞、顧客の信頼を得ることの大切さなどについての話に、次々と質問が出て、予定を大幅にオーバーしてしまうほどであった。(この日だけは日本語による研修)

個別プロジェクトでは、自分たちで訪問先を決め、そこへの交通手段、金額、支払い方法などを調べて実際に行き目的を達成してくる活動を行い、さまざまな失敗をしながら、ハワイの日常生活を自ら体験した。

8. 学生のアンケート結果

研修前と研修後に 4 種類のアンケート (記名式) を実施した。結果は以下の通りである。

8.1 アンケート 1: 留学決定直後(10月)に実施

留学が決めた直後に、応募理由と留学の将来への効果について、自由記述のアンケートを行った。回答の結果は Table 3 の通りである。

Table 3 Students' Feedback in October

質問	回答	
ハワイ(3月の4週間), カナダ(2月の4週間)ではなく、本留学に応募した理由	2週間の短期だから(初留学, 不安, 就活)	55%
	費用が安いから	35%
	選抜がないから	5%
本研修による将来への効果の予想	英語の学習意欲向上 英語への意識向上	65%
	視野・考え方の広がり	25%
	異文化への興味・関心	15%
	他国人との積極的な交流	15%

8.2 アンケート 2: 出発直前(1月)に実施

秋セメスターの授業が終わり、事前学習が終盤に来た時期に、留学前学習について選択式のアンケートを行った。回答結果は Table 4 の通りである。

Table 4 Students' Feedback in January

秋セメ英語授業での意欲	以前より高い	60%	留学との関係あり 50% なし 10%
	以前と同様に高い	20%	
	低い+無回答	20%	
自主リスニング学習の意欲	以前より高い	55%	留学との関係あり 50% なし 5%
	以前と同様に高い	20%	
	低い+無回答	15%	

8.3 アンケート 3: 研修終了直前(2月23日)に実施

研修をあと 2 日残すのみとなった 11 日目の朝、本研修プログラムの全活動に関して、どれほどの興味を持って取り組んだか、どれほど学んだか、を 5 段階の選択式で回答してもらった。結果は Table 5 が示す通りである。

Table 5 Students' Feedback on Day 11(1)

		興味あり学んだ ← → 興味ない学んでない				
		+2	+1	0	-1	-2
RW 授業	興味	35%	50%	10%	5%	0%
	学び	35%	50%	15%	0%	0%
SP 授業	興味	75%	20%	5%	0%	0%
	学び	50%	45%	5%	0%	0%
ダイヤモンド・ヘッド	興味	70%	15%	15%	0%	0%
	学び	45%	30%	25%	0%	0%
現地学生と夕食会	興味	75%	20%	5%	0%	0%
	学び	65%	15%	15%	5%	0%
個別プロジェクト	興味	45%	30%	25%	0%	0%
	習得 学び	45%	40%	10%	0%	5%
高校見学	興味	75%	10%	15%	0%	0%
	学び	55%	20%	20%	5%	0%
数学ワークショップ	興味	25%	60%	15%	0%	0%
	学び	30%	40%	10%	20%	0%
ハールハーバー	興味	65%	35%	0%	0%	0%
	学び	65%	30%	5%	0%	0%
水環境の実地研修	興味	30%	50%	20%	0%	0%
	学び	40%	50%	10%	0%	0%
企業見学	興味	45%	45%	5%	0%	5%
	学び	55%	35%	5%	0%	5%

+2: 興味をもった/学んだ, +1: 少し興味を持った/学んだ, 0: どちらとも言えない, -1: 余り興味がなかった/学ばなかった, -2: 興味がなかった/学ばなかった

8.4 アンケート 4: 研修終了直前(2月23日)に実施

11 日目の朝、帰国後の大学生活に関して、どのようなことに意欲を持っているか、選択式アンケートで調査した。結果は Table 6 の通りである。

Table 6 Students' Feedback on Day 11(2)

TOEIC などの試験に向けて勉強しようと思う	90%
英語の授業で今までより積極的に学習しようと思う	70%
外国人とメールでやり取りしようと思う	65%
外国人の友達を積極的に作ろうと思う	60%
授業外に自主的に英語の本などを読もうと思う	55%
海外旅行を計画しようと思う	55%
広く外国文化について知識を得ようと思う	50%
自主的に英語のリスニング学習をしようと思う	45%
次の留学を計画しようと思う	40%
海外で働くことも視野に入れて就活をしようと思う	40%
選択の英語科目を履修しようと思う	35%
海外のインターンシップ参加を計画しようと思う	20%

9. 考察

2009 年に計画を始めた情報通信学部の留学プログラムは、当初その目的を絞り切れず、一旦中断したが、2010 年度に教育的価値を明確にし、再度計画を立て、2011 年度に実施に至った。「グローバル・イングリッシュ 研修」と名付けた第 1 回留学プログラムは、以下の 4 点において、まずまずの成果が納められたと思われる。

第 1 点は、意欲のある学生が全員行けることに教育的価値を置き、英語力による選抜をせず、費用を低く抑えた点である。留学が決定した直後の 10 月の記述式アンケートで、「2 週間の短期のため参加した」と答えた学生が 55%、「費用の面で応募しやすかったから参加した」という学生が 35%であり、期間を短く、費用を安くしたことが、多くの学生の参加につながったことがわかる。

2 点目は、留学が具体的になったことで、留学までの日常の学習に意欲的に向かうようになった点である。出発前（1 月）のアンケートで、「留学することが関係して、秋semesterの英語授業やリスニングの学習を普段より意欲的に取り組んだ」と答えた学生が 50%いた。留学期間は短期であっても、それが長期にわたる事前学習の意欲を促す力になったことを示している。現地に滞在する期間だけでなく、それ以上の教育的価値を留学によって得られることがわかる。

第 3 点として、異文化体験活動を 2 週間のプログラムにたくさん組み込んだ点があげられる。研修終了期（2 月 23 日）に実施したアンケートによると、数学のワークショップを除くすべての活動に 75%以上の学生が「興味持った(+2)」または「少し興味持った(+1)」、「学んだ(+2)」または「少し学んだ」と回答している。

特に、同年代の学生たちとの交流（現地学生との夕食会、高校授業訪問）について、75%の学生が「興

味持った(+2)」と回答しており、異文化の人々との交流を実感したことが想像される。また、日本語を勉強している現地学生の日本語の方が自分たちの英語より上手であることで発奮したという学生や、テクノロジークラスのレベルの高さに圧倒されたという学生の声をたびたび聞き、多くの刺激を受けたことがわかった。

さらに、パールハーバーの見学と講義に関しては、100%の学生が興味を持ち（興味を持った：65%、少し興味を持った：35%）、95%の学生が学んだと感じている（学んだ：65%、少し学んだ：30%）。パールハーバーは当初の計画には入っていなかったが、この研修の主目的である「多くの異文化を体験し、視野を広げる」ための活動として追加したものである。参加人数が当初の予想を 5 名上回ったおかげで、授業以外の活動に充てる費用が増え、募集前には予定していなかった実地研修や見学を盛り込むことができ、研修内容を豊かにすることができた。余剰金を追加の言語学習に費やすのではなく、このような歴史的・文化的学習にまわしたことは、非常に有意義であったと思われる。

最後に第 4 点として、帰国後の大学生活における意欲向上の可能性があげられる。研修終了期（2 月 23 日）に実施したアンケートから、ほとんどすべての学生が語学力向上に意欲を持っていたことが分かった

（TOEIC などの試験に向けて勉強しよう：90%、英語の授業で今までより積極的に学習しよう：70%）。また、積極的に世界へ向けて行動しようとする姿勢（外国人とメールやり取りしよう：65%、外国人の友人を作ろう：60%、外国文化の知識を得よう：50%、英語の読書をしよう：55%、海外旅行の計画：55%）が見られる。渡航前のアンケートでは、異文化に対する興味・関心が増すことを予想した学生は 15%だけであったことと比較すると、異文化の中での 2 週間で、世界とのかかわりに大いに意欲が膨らんだことが推測できる。

アンケート結果から改善の検討が必要と思われたことは、Math のワークショップである。一部の 2-3 年生の興味を引かなかった理由は、活動内容が日本での英語必修科目で既に学習したこととよく似ていたためであった。研修先の HTIC と学習内容の調整は事前にメールでやり取りしたが、すべての既習内容を知らせることはできなかったため、やむをえないと思われる。しかし、英語に自信がない 2-3 年生にとっては、一度学習した内容のためよく理解でき、自信を持って活動できた、という感想もあり悪いばかりではなかったかもしれない。

10. まとめと今後の課題

本稿では、情報通信学部が独自に計画する留学の教育的意義を確認し、留学プログラムの実施に至るまでの準備と、実施したグローバル・イングリッシュ研修の内容を報告し、学生によるアンケートの回

答からその成果を考察した。

グローバル・イングリッシュ研修は、短期間の留学で国際的視野を持つきっかけを経験することを目標としたため、一般的な語学研修とは異なる多くの要望を HTIC のスタッフにお願いし、多種にわたる異文化体験を組み入れてもらう必要があった。同時に日本では、短期間の留学の教育価値が高まるよう、事前学習にて言語面と文化・生活面の支援をした。その甲斐があって、学生の満足度の高い研修となり、現地スタッフからは、学生たちが積極的に活動に取り組み、質の高い研修であった、とのお褒めの言葉をいただいた。日本・ハワイの共同作業によって実施できたグローバル・イングリッシュ研修は、まずまずの成果があったと言えそうだ。

今後は、この異文化体験をより充実したものにするために、帰国後のフォローアップが大切となる。その方法として、大きく2つが考えられる。

1つ目は、情報通信学部 に在籍している大勢の留学生を交えて「国際フェア」のような催しを開くことである。東海大学国際教育課の留学制度から帰国した学生たちが「東海大学国際フェア」に参加することで留学体験をさらに深められた、という渡航後の活動例が報告されており⁹⁾、参考にできそうである。

2つ目は、最終アンケートで各学生が「帰国後にやろう」と回答した気持ちをすぐに実行させる方法である。たとえば、渡航前と同様に、教員から学生に英文 E メールでハワイの友人の様子を聞き、Eメールのやり取りを促したり、授業外でどれほど英語にかかわっているかを学生から報告させ、積極的な自主学習を促したりすることなどが可能である。また、昼休みに外人教員や留学生とともに English Lunch の会を定期的に行ったり、放課後に英語読書会を行ったりするなど、学生が中心となって進められそうな小さな活動の提案や支援をすることが可能である。普段の生活の中で無理なく進められるフォローアップ学習は効果的であり、新学期からすぐに始めるべきであろう。

さらに今後もグローバル・イングリッシュ研修を続けていくのであれば、長期的な課題として、Sutton & Rubin¹⁰⁾や Bennett¹¹⁾が述べるように、留学の結果を数値化して効果を測定し、説明できる必要がある。留学の成果（留学による異文化理解や国際性志向の向上）をどのようにして測り、学生やその親に投資の見返りをどう説明するか、難しい課題である。

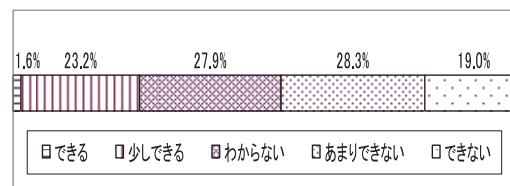
参考文献

- 岡田礼子, 中山千佐子: 情報通信学部の英語教育プログラム―理念と初年度前期の実践―, 東海大学紀要情報通信学部 Vol.1, No.2, pp1-6, 2009
- 岡田礼子・中山千佐子・ヴィーンストラ ジェイ: 初年次教育での学習習慣と意欲の喚起―教員連携と学生の自主管理に向けて―, 初年次教育学会誌 第2巻 第1号, pp64-71, 2009
- 東海大学/各短期大学(部) 海外派遣留学プログラム 2011

- 足立恭則: 大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ, 東洋英和女学院大学人文・社会科学論集 第28号, pp.77-91, 2101
- 西川恵: 留学準備英語教育の役割と「東海大学国際フェア」～留学体験を帰国後のフォローアップでより充実させるために～, 東海大学外国語教育センター所報 第28号, pp.41-50, 2008
- 朝日新聞「内向き日本, 海外留学尻込み, 04→08年, 2割減」2012年1月29日
- Japan Business Press 「増える留学生数, 米国高等教育機関―日本は大幅減, 10年前の半数以下」北米報知, 平成23年11月16日号
http://jbpres.ismedia.jp/articles/-/30810
- Paige, R. M., Cohen, A. D., Kappler, B., Chi, J. C., & Lassegard, J. P. *Maximizing study abroad: A students' guide to strategies for language and culture learning and use.* Minneapolis: University of Minnesota, 2002
- 西川恵: 日本人英語学習者の英語学習における動機付けについて―動機付けモデルの変遷と教育現場への応用―, 東海大学紀要外国語教育センター第29号, pp.71-83, 2008
- Sutton, R. & Rubin, D. The GLOSSARI Project: Initial Findings from a System-Wide Research Initiative on Study Abroad Learning Outcomes. *The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, vol.10 pp.65-82 Fall, 2004
- Bennett, J. M.: *On Becoming a Global Soul: A Path to Engagement During Study Abroad, Developing Intercultural Competence and Transformation*, pp.13-31, Sterling: Stylus Publishing, 2008

付録

付録1 英語で返答できるか
(2009年4月新入生 315名)



付録2 英文 Eメールに返信できるか
(2009年4月新入生 315名)

